

口腔、鼻腔粘膜および乳頭に糜爛を呈した黒毛和種繁殖牛の大腸菌性肺炎の1例

淡路基幹家畜診療所

長谷川弘哉 笹倉春美 山本直史 黒木智成 藤本修司

住 伸栄 今井正士 橋本宰昌 大平正信

口腔粘膜、鼻鏡、蹄冠部および乳房周辺に水疱、糜爛および潰瘍を呈する熱性疾患として代表的なものに口蹄疫が挙げられるが、類症疾病との鑑別が必要となる。今回、管内の黒毛和種繁殖農場で、口腔、鼻腔粘膜および乳頭に糜爛を呈した黒毛和種繁殖牛の大腸菌性肺炎が発生した。

材料および方法

1. 症例 2008年5月8日生まれの黒毛和種繁殖牛で、最終分娩日は2010年3月14日であり、導入日の2009年2月11日から初診日の2010年5月24日まで病歴はなかった。
2. 臨床経過 食欲不振との主訴で求診があり、体温40.7、聴診にて肺胞音粗励を認めた。初診時は口腔粘膜に糜爛等の異常は認められなかった。呼吸器病を疑い、抗生剤、補液剤等で治療したが、熱発、食欲不振が続いた。第6病日となる5月29日には体温38.7となったものの、起立困難を呈し、口腔、鼻腔粘膜および乳頭に糜爛が認められたため、洲本家畜保健衛生所に立ち入り検査を依頼した。6月1日に鑑定殺処分となった。
3. 検査項目 5/29:血液検査、ウイルス検査 6/1:病理検査、細菌検査、ウイルス検査

結果

1. 血液検査 WBC:2200/ μ L, RBC:1016 \times 10⁴/ μ L, Ht:44.2%, TP:4.6g/dL, Alb:2.6g/dL, T-Bil:1.1mg/dL, AST:371U/L, CK:1521U/L, Glu:143mg/dL, BUN:22mg/dL, Cre:1.1mg/dL
2. 病理検査 歯齦、舌根、食道に糜爛を認めた。黄色の胸水貯留、重度の出血性、線維索性肺炎を認めたほか、肝臓の脆弱化、第四胃で潰瘍および糜爛、腎臓で出血性梗塞を認めた。グラム染色を施した肺病変の組織切片において、グラム陰性短桿菌を認めた。
3. ウイルス検査 牛ヘルペスウイルス(BHV)1,2および4型、牛ウイルス性下痢ウイルス(BVDV)、牛RSウイルス(BRSV)陰性であった。
4. 細菌検査 肺病変部からの直接スタンプ標本で短桿菌を確認し、培養検査を実施した結果、有意に大腸菌(*Escherichia coli*)を分離した。

まとめ

本症例は水疱形成を伴わず、牛群内で単発であったことなどの疫学的要因から口蹄疫は否定し、検査結果から大腸菌性肺炎と、それに伴うエンドトキシンショックを発症していたと診断した。エンドトキシンは粘膜面での潰瘍を誘発することが報告されており、口腔、鼻腔などの粘膜、および乳頭における糜爛はエンドトキシンショックに伴い形成されたものと考えられた。今回は発症要因の解明までには至らなかったが、大腸菌性肺炎は家畜での報告が少なく、稀有な症例であった。